

平成 27 年 1 月 29 日

ところ会 2 月行事案内

平成 27 年度、第 2 回テーマ：

荻野吟子記念館と聖天山をバスでめぐる<福祉バス>
(吉見百穴、松山城跡、歓喜院聖天堂、荻野吟子資料館)

平成 27 年第 2 回の行事は福祉バスを利用して吉見百穴、松山城跡、歓喜院聖天堂、荻野吟子資料館を選んでみましたので案内をいたします。今回は高速道を利用するために狭山ヶ丘駅を集合場所にしました。松山城跡は 30m 位の小山ですので歩きやすい靴でご参加下さい。

記

■日 時：平成 27 年 2 月 20 日（金）8 時 30 分集合 雨天決行

■集合場所：西武線池袋線狭山ヶ丘駅東口・ロータリー

■見学場所及び時間

狭山ヶ丘駅東口・ロータリー(8:40)⇒圏央道・入間 IC⇒関越道・松山 IC⇒吉見百穴・松山城 (9:20~10:40) ⇒聖天山・昼食 (12:30~14:15)⇒荻野吟子記念館(14:30~15:15)⇒道の駅かわもと(15:50~16:15) ⇒帰路(関越道・松山 IC⇒圏央道・入間 IC) ⇒小手指駅 ⇒解散(17:15)

■参加費用：3500 円（食事代、入園料含む）

■昼食場所：和食ダイニングあか石

・寿司セット

（そば・うどん+聖天山名物いなり寿司+小鉢）

寿司セット（¥1,000）以外のメニューを希望の方は金額に応じて精算します。また、コーヒー・飲物は別料金です。

<吉見百穴(ひゃくあな)>

入園料：中学生以上：300 円

吉見百穴は古墳時代の末期（6 世紀末～7 世紀末）に造られた横穴墓で、大正 12 年に国の史跡に指定された。横穴墓は丘陵や台地の斜面を掘削して墓としたものであるが、死者が埋葬された主体部の構造は古墳時代後期の横穴式石室とほとんど同じである。百穴が分布する一帯は凝灰質砂岩と呼ばれる比較的掘削に適した岩盤が広がっており、当時の人々は掘削するのに適した場所を探して横穴墓を造ったと考えられる。現在確認できる横穴の数は 219 基である。



【横穴式の石室】

横穴のほとんどは壁際に 10~20cm 程の段が作られている。これが死者を安置した部分であり、一つの横穴に二つの段があるということは複数の人が葬られたことを示している。また、横穴墓の入り口には「緑泥片岩」の石の蓋が立てかけられていた。この蓋の存在は、横穴に死体を葬った後であっても、再び石室内に入ることが可能であることを意味する。こうした構造から、横穴墓は一つの横穴に複数の死者を葬る「追葬」を前提にしているのである。これは古墳時代後期に造営された古墳の石室構造と同じものである。

【石室の変遷と被葬者】

3~4 世紀に発生した初期の古墳は「縦穴式」の石室構造であり、追葬は困難であった。このころの古墳の被葬者は大豪族や大王と言った権力の頂点にいる人々であったが、古墳時代の後期には大豪族や大王の側近などの豪族も古墳を造営し日本各地で古墳群を形成するようになった。この頃、大陸から横穴式の石室構造が伝来し、一つの古墳に複数の死者を葬る「追葬」を行うようになったのである。その後、社会的な変化や時代の変遷によって大規模な古墳は造営されなくなり、古墳時代の終焉には吉見百穴に見られるような横穴墓群になっていった。こうしたことから吉見百穴に葬られた人々は「豪族」「渡来人」と言った当時の社会で特殊な集団であったことが考えられるのである。

【吉見百穴の時代】

仏教が伝来したのは西暦 552 年（一説には 538 年）、聖徳太子が推古天皇の摂政となって活躍したのは西暦 593 年~622 年であり、百穴が造られ始めたころとほぼ一致する。仏教が本格的に広まるのは後年のことではあるが、古墳を造営して死者を葬っていた当時の日本人の死生観に大きな影

響を与えたと想像することが出来る。また、6～7世紀は地方豪族の連合体の首長として君臨していた大和朝廷がその支配力をいっそう強め、日本全体が中央集権国家へと移り変わっていった時期である。西暦645年の「大化の改新」以降、中央集権国家としての国家機構は加速していくことになる。646年には葬送の儀式に関係した「薄葬令」が出された。「薄葬」とは一言でいえば「簡単に葬ること」で、地方豪族の権力の象徴と言える古墳の造営を禁止した法律である。西暦652年には班田収受法が施行され、豪族の支配していた「土地」と「人」のすべてが大和朝廷の支配下に置かれるようになり、公地公民制が本格化されていった。この「仏教伝来」「中央集権国家」という日本の社会の大きな変換期に百穴は造られたのである。

【地下軍需工場跡】

昭和19年～20年に、吉見百穴とその周辺の丘陵地帯に大規模な地下軍需工場が造られた。今でも通行可能な直径3メートル程の開口部を持つ洞窟が地下軍需工場の跡である。縦と横の洞窟がそれぞれ交差し碁盤の目になっているのが特徴である。



現在のさいたま市にあった中島飛行機工場の移転場所として、掘削に適した場所である吉見百穴地域に軍需工場が造られることになった。本来、市ノ川は湾曲しながら百穴の裾の付近を流れていたが、地下軍需工場の前面に平地を確保するため川を西に移動させ、湾曲した川を直線に改修し現在のようになったと言われている。軍需工場の対象となったのは松山城から岩粉坂までの直線距離にして約1300m部分だが、地下施設工事に適した凝灰質砂岩の分布は百穴と岩粉山付近でしか認められず、工事は難航したと言われている。七月頃には機械が搬入されエンジンの部品が製造され始めた様であるが本格的な生産活動に移る前に終戦となった。

この工事に携わったのは全国から集められた3,000～3,500人の朝鮮人労働者で昼夜を通した突貫工事であった。掘削工事に従事した最後の人の帰国に際し、日本と朝鮮との平和を希望して植えられたムクゲの木は現在でもこの地で成長を続けている。

【ヒカリゴケ】 ー国指定天然記念物ー

ヒカリゴケはコケ類の一種であり、緑色の光を放出しているように見えるところから、この名がついている。ヒカリゴケの生育には、一定の気温と湿度を保つ環境に恵まれることが必要で、この条件に合った吉見百穴の横穴墓内にはヒカリゴケが自生している。ヒカリゴケは一般的に中部以北

の山地に見られるが、関東平野に生育していることは植物学上極めて貴重である。

【町立埋蔵文化財センター】

吉見百穴の構内にあり、吉見町の埋蔵文化財等が収蔵展示されている。

＜松山城（武蔵国）＞ (国指定史跡)

すでに国指定史跡であった菅谷館跡に、杉山城跡、小倉城跡、松山城跡を加え、平成20年に「比企城館跡群」として国指定史跡となる。

(構造)

ふもとをめぐる市野川を天然の堀として利用して標高57.9mの丘陵上に建てられた平山城。市野川をはさんで対岸にあたる比企郡の松山本郷（現在の東松山市）は平地になっており、城下町が形成された。



青線のルートを行く予定です。晴れていれば本曲輪から富士が望めます。

松山城は西よりの本曲輪を主郭とし、周囲に巨大な空堀を張り巡らせて曲輪を山全体に連ねた壮大な縄張である。「城山」には空堀の遺構が良好に保存されており、城郭主要部の面積の50%余りにも上る部分を空堀が占めるとい特徴的な縄張りを十分に観察することができる。城郭中央部には、軍勢の駐屯に適した大規模で単純な構造をした曲輪が築かれていたが、東北自動車道造成のため昭和45年に行なわれた採土によって遺構が失われ、この場所は武蔵丘短期大学となっている。

(築城)

築城は応永6年(1399年)上田友直により築かれたと云われる。

(戦国時代)

室町時代から戦国時代にかけては、武蔵国中原の要衝として、関東の諸勢力による激しい争奪戦が展開された。松山城を築城したと考えられる上田氏は当初扇谷上杉氏に部将として属したため、この城は東方の下総国古河に本拠を構える古河公方および北方の上野国から武蔵国中央部への進出を狙う山内上杉氏に対する前線拠点として機能した。

後に北条氏の勢力が相模国から武蔵国に伸張してくると、扇谷上杉氏と山内上杉氏・古河公方の三勢力の間で和睦が成立し、南方より侵攻してくる北条氏に対する拠点となった。

天文6年(1537年)には河越城が北条氏綱によって攻め落とされ、さらにその余勢を駆った北条勢によって松山城も攻撃を受けたが、城主難波田憲重らの活躍で撃退に成功した。この結果、松山城は河越城を失った上杉朝定の居城となった。

扇谷上杉氏は川越城奪回を目指して攻めるが、天文14年(1545年)、河越夜戦での河越城奪還の失敗によって扇谷上杉氏が滅亡すると、松山城は北条氏康の手に渡った。同年に難波田憲重の婿であった上杉方の太田資正(太田道灌のひ孫)が奪回し、同じく縁戚であった上田朝直が城代になるものの、その上田朝直が北条氏に寝返ったため再び北条方の城になった。

永禄4年(1561年)、上杉謙信が奪取して岩槻城主の太田資正を城代にする。しかし、永禄6年(1563年)に北条氏康と武田信玄の連合軍の攻撃の前に再び陥落、北条氏のもとに戻った。この合戦以後松山城は一時北条氏の直轄となったものの、元亀年間以後は一貫して北条氏家臣団に組み込まれた上田氏の居城となり、同氏は松山領と呼ばれる比企地方一帯を支配下に置いた。

(安土桃山～江戸時代)

天正18年(1590年)には豊臣秀吉による小田原征伐で落城した。その後、徳川家康の関東入国とともに、松平家広が入城して松山藩を立藩するが、慶長6年(1601年)松平忠頼の時浜松藩に移封となり松山城は廃城、この地域は川越藩の藩領となった。

幕末の慶応3年(1867年)になると川越藩主であった松平直克が前橋藩に移封となり、飛び地となった比企・入間地域6万石余を統治するための拠点が必要になったが松山城は使用されず、西に約1.7km離れた現在の市役所の地に松山陣屋が設置された。

<妻沼聖天山>

ボランティアガイドの案内があります

妻沼聖天山は治承3年(1179)齊藤別当実盛が聖天様をお祀りしたのに始まります。

本殿「聖天堂」は、宝暦10年(1760年)に再建されました。日光東照宮を彷彿させる本格的装飾建築で、その精巧さゆえに「埼玉日光」と称され、国宝に指定されています。平成15年から「平成の大修理」が行われ、平成23年から聖天堂の一般公開が開始しました。

妻沼聖天山は日本三大聖天*の一つとして知られ、特に縁結びの霊験あらたかです。夫婦の縁をはじめとし、家内安全・商売繁盛・厄除け開運・交通安全・学業進学などのあらゆる良縁を結んでいただけます。

※日本三大聖天：浅草待乳山聖天、奈良生駒聖天と妻沼聖天他の一つ

【境内の見どころ紹介】

- ・貴惣門(国指定重要文化財)：妻沼聖天山聖天堂の正門として建てられた雄大な八脚門で、側面(妻側)に破風を三つ重ねた類の少ない独特な形をしている。
- ・斎藤別当実盛公像：熊谷直実や畠山重忠と並ぶ、源平合戦の英雄で、聖天山を開いたとされる。若者に侮られまいと白髪を染めて最期の戦いのぞむ場面は有名で、戦前の小学校の唱歌にもなりました。
- ・健康長寿観音：関東ばけ封じ33観音の第16番札所の本尊です。
- ・四脚門(市指定文化財)：聖天山は数多く火災に遭っていますが、四脚門は一番古くから残った建物で、400年近く前の姿を残します。
- ・平和の塔：春は桜、秋には紅葉が美しい場所です。平和の塔の脇を過ぎると、滝の傍らに軍荼利(ぐんだり)明王が見えます。滝は甘露の水を表しています。

・歎喜院本坊前の板碑（県指定文化財）：鎌倉時代のもので、長野県の善光寺の仏様を彫った珍しいものです。

【妻沼聖天山本殿】（国宝）：H24年に国宝に指定された。埼玉県建造物としては第一号。



聖天堂の彫刻その1 「二つの鳳凰」

聖天堂は、奥殿と拝殿を中殿が結び付ける「権現造り」という建築様式を用いており、その三つの建築の各所に、多くの彫刻が施されています。

それらの彫刻は、上州花輪村（現在の群馬県みどり市）の彫刻師であった石原吟八郎を中心に制作されたものです。吟八郎は、日光東照宮の修復に参加したほか、北関東を中心とした多くの社寺建築に彫刻を残しています。

吟八郎やその弟子たちによって、数多くの聖天堂の彫刻が作られています。その中で、精緻を極めた彫刻の最たる例が、奥殿の外部における南側と北側に施された一対の「鳳凰」です。

この彫刻は吟八郎の次の世代である名工二人によって彫られたものであり、南側を小沢常信が、北側を後藤正綱が手掛けたとされています。二つの彫刻の作風は異なり、常信作は、彫りの緻密さによって鳳凰の表情に厳しさを与え、正綱作は、大胆な彫りによって表面を立体的に仕立てています。



鳳凰（北）



鳳凰（南）

聖天堂の彫刻その2 「琴棋書画」

聖天堂の拝殿、その正面には特徴的な彫刻がはめ込まれています。

この彫刻の画題は「琴棋（きんぎ）書画」と呼ばれています。

この琴棋書画とは、中国古来の文人における必須の教養や風流事を意味する、「琴」、「碁」、「書」、「絵」の四芸のことであり、日本では室町時代以降における屏風絵や工芸品の図柄などのモチーフとして多く見ることができます。

聖天堂の琴棋書画の彫刻に目を向けると、左から「絵を見る子ども」、「碁を打つ人々」、「琴を弾く男」、「文字を読み書きする子ども」の順で配されており、彫られた人々の温かな表情が、見る人の心を和ませています。



この琴棋書画の彫刻は、寺社建築の一部に置かれることはありますが、聖天堂のように、拝殿の正面という建築のシンボリックな場所に配置されることは、あまり例を見ません。親しみやすい琴棋書画を用いたその彫刻は、聖天堂と庶民とのつながりの深さを示すものであると言えます。

聖天堂の彫刻その3 「三聖吸酸」

聖天堂の奥殿の南側上部、唐破風の下には、三人の聖人が一つの瓶を囲んでいる彫刻があります。これは、孔子、釈迦、老子が酔をなめて、その酸っぱさを共感している様子を表現したものであり、「三聖吸酸」という中国の故事に由来しています。つまり、酔が酸っぱいという事実は皆同じであり、儒教、仏教、道教など、宗教や思想が異なっているとしても、真理は一つであるという「三教一致」を意味しています。



この故事のオリジナルは、儒教の蘇軾と道教の黄庭堅という二人の書家が、仏教の仏印禅師のもとを訪れた際に、桃花酸という酔をなめ、三人が共に顔をしかめたという逸話に基づいています。

「三聖吸酸」は、寺社建築や屏風絵などの題材として使用されることがあり、聖天堂における三聖吸酸の彫刻では、三聖人が前方を向き、共に人差し指を立てながら、酸っぱさを確認するように口を小さく開けています。その表情はとても温和であり、親しみを感じることができます。

また、彩色に目を向けると、孔子の服装や中央の瓶、植物の彫刻などに使われている緑色は孔雀石を原料としており、その色合いからはとても落ち着いた雰囲気醸し出されています。これらの表情や彩色は、漆塗りされた周囲の木枠の中心に浮き上がり、独特の空間を作り上げています。

＜熊谷市立荻野吟子記念館＞ ボランティアガイドの案内があります

嘉永4年（1851年）に荻野吟子は、現在の熊谷市俵瀬に生まれました。自分の体験から女性医師の必要性を痛感し、医師になることを決意します。

当時、女性には医師の道は閉ざされていましたが、目の前に立ちほだかる壁を信念とたゆまぬ努力で克服し、明治18年（1885年）医業開業試験に合格して、日本公許登録女医第1号となった埼玉県三大偉人^注の一人です。

記念館は荻野吟子女史の生家の長屋門を模した、瓦葺屋根・漆喰一部下見板の和風建築で、部屋は展示室と休憩室に分かれ、展示室には荻野吟子女史の生涯を時代に合わせて説明した年表や資料を展示しています。

注：埼玉県三大偉人とは、①渋沢栄一、②塙保己一、③荻野吟子